

医療安全面でも知っておきたい！

エンゼルケアの コミュニケーション

患者さんに看護師として行う最期のケアともいえる「エンゼルケア」は、ご本人にとって、ご家族に対してとても配慮が必要となる大切な行為です。ご家族とのささいな行き違いからトラブルになることもあるので、エンゼルケアのコミュニケーション能力を高め、安心して最期のケアを行いませんか？

現代社会を表すキーワードから見えてくる エンゼルケア

たとえば「少子社会」からは、以下のようなエンゼルケア時の配慮点が見えてきます。

何人も兄妹がいる場合と比べて、一人っ子や二人兄妹の人は、介護も看取りも、兄妹での分担や連携の機会が少ないか少なく、費用面を含め心身の負担増になる場合が多いと思われる。

つまり、兄妹がいない、あるいは少ない人が親を看取る場合、さまざまな判断への不安や疲労がその分増すと考えられます。一人っ子の場合「これでよかったのだろうか」という問いを兄妹で共有

することもできません。

ゆえに不安を少しでも減らすために「これでよかったのだ」という思いにつながるようなエンゼルメイクの場面を持つことや、疲労への配慮(看取りの場面でベッドサイドにお座りいただく椅子を用意するなど)をすることもポイントになってきます。

また、子供のいない人(高齢者の場合、当然孫やひ孫もない)の看取りの場面では、亡くなった本人と看取る人の関係性を見極めてコミュニケーションを取る必要があります。エンゼルメイクの場面では、関係性によって、身体の清拭、着替え、顔の整えなどの際、そばにきていただくタイミングや実施を促す判断にも、ご本人との距離感を加味する必要があります。

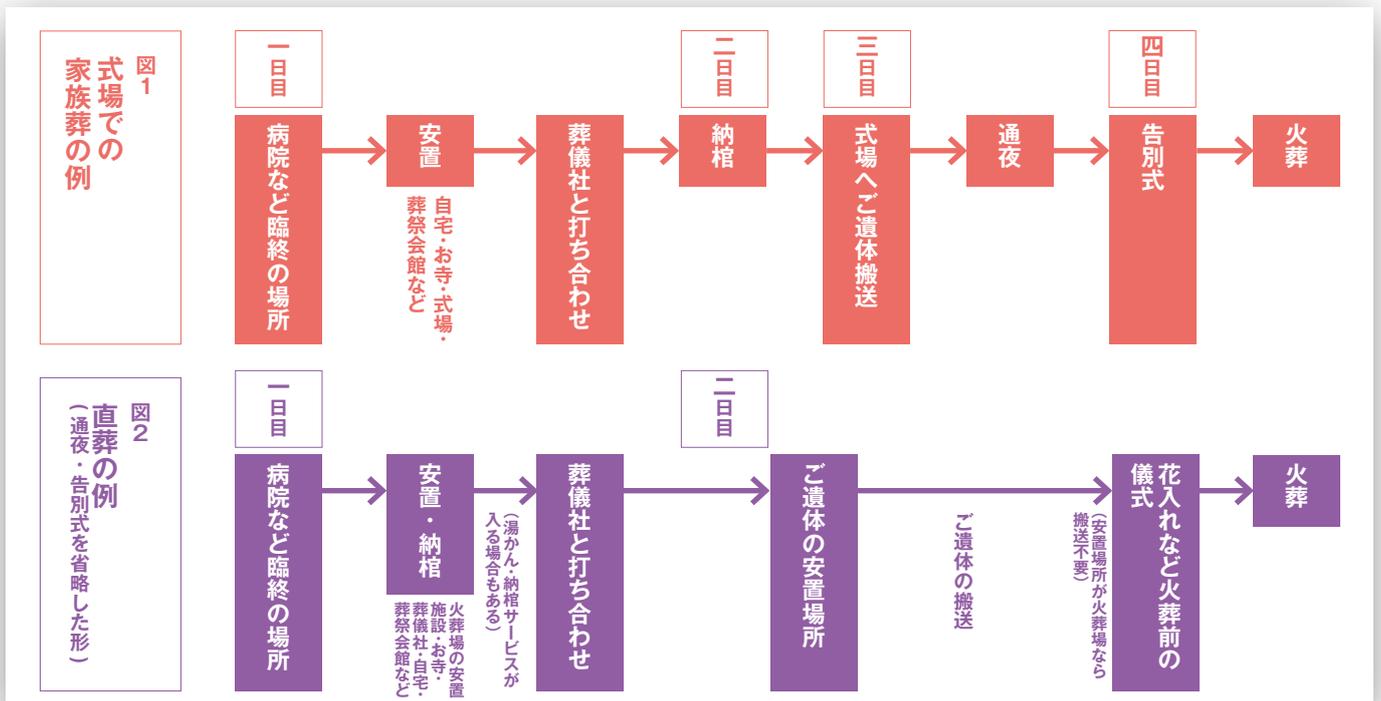
ほかにも、核家族、遠距離介護、墓じまい、格差社会などなど現代社会をあらわすさまざまなキーワードを通して検討してみると見えてくるエンゼルケアがあると思います。



「葬送の簡略化」というキーワード

近年、少子化、価値観の多様化、不況などを背景に、葬送の簡略化が拡大しています。

図1は、都内の葬儀社に取材した家族葬の一例です。家族を中



エンゼルメイク

亡くなったその人らしい容ぼう・装いに整えるケア全般のこと。つまり、身だしなみの整えのこと。保清や臭気対策、更衣、顔のメイクなど。

エンゼルケア

エンゼルメイク、創部への処置、家族への対応など、担当している間のすべての死後ケアのこと。

アドバイザー

小林 光恵 (こばやし みつえ)

エンゼルメイク研究会代表



1960年茨城県行方市生まれ。東京警察病院看護専門学校卒業後、看護師として東京警察病院、茨城県赤十字血液センターなどに勤務のち、出版関係専門学校を経て編集者として各出版社に勤務。1991年に独立し、執筆の仕事が中心となる。「おたんごナース」「ナースマン」など。看護に美容ケアをいかに会代表。最新刊「介護はケアマネで9割決まる！」。

心とした少人数で執り行う、臨終の日から火葬までの4日間の流れです。

図2も、都内の葬儀社に取材した葬送の例です。直葬(通夜・告別式を省略した形)と呼ばれる2日間の流れです。都内では、この直葬の形を選ぶケースが3割を超えており、今後増えてゆく感触があると葬儀社の方はお話でした。

最近では、臨終を迎えた老人ホームなどのベッド上から火葬場へ直行するケースもあるようです。病院などは臨終後にほどなく退院する流れとなるため、俗に遺体ホテルなどと呼ばれることもある施設で一旦過ごしたのち、火葬所へ向かうケースもあるようです。日本では臨終後24時間は火葬してはいけないという法律があります。

そこから見えてくるエンゼルケア

前述の少子化の関係などで、看取りの時点で家族はかなり疲弊している場合が多いことを考えれば、看取りのあとの「おくること」は速やかに済むほうが心身の負担が少ないといえるでしょう。

しかし簡略化によって、圧倒的にご遺体と過ごす、あるいはご遺体と接する時間が短くなります。

家族はグリーフワークのなかで、看取りから火葬までの各場面を思いかえすことが少なくありません。ですから、「おくる」前段の「看取り」の段階が貴重な場面となり、そこでしっかりご遺体に接する、ご遺体と濃厚に過ごす、ということを意識した対応をすることがエンゼルケアの充実につながると思うのです。

具体的には、エンゼルメイクに可能な範囲でご家族に手を出していただいたり、前回このページでご紹介した「抱きうつし」(ベッドからストレッチャーへのご遺体をお運びするのを家族に行っていただく)をうながしたりして、亡くなったその人を大切に作る作業を行った実感を得て、その事実を記憶していただくことが、その後のグリーフワークを助けることにつながると考えています。

関連書籍

『ナースのための決定版 エンゼルケア』小林光恵 著(学研メディカル秀潤社)

『説明できるエンゼルケア』小林光恵 著(医学書院)

『ご遺体の変化と管理』伊藤 茂 著(照林社)

コミュニケーションの充実に向けて 知っておきたいこと ④

霊柩車の変遷から見えてくる 感覚の変化

霊柩車は、葬送においてご遺体を移動させるために使われる車両です。

病院から自宅などにご遺体を移動させるバン型車も霊柩車ですが、「寝台車」「搬送車」と呼ばれています。

目立ちたくない、知られたくないという感覚

以前は、図3のような宮型霊柩車が多く用いられており、小、中学校の登・下校時などにときどき見かけました。その霊柩車を見たら親指を隠さないと親の死に目に会えないといわれていたため、この車を目にしたとき慌てて親指を隠しながら、「誰かが死んだんだな」と思い、怖いような悲しいようななんとも言えない感情に襲われたものでした。友達とふざけながら路肩を歩いているときに、ふいにあの車が過ぎて行き、人の死が現実として迫ってきたように感じていた気がします。

現在の需要は、図4のような洋型霊柩車がほとんどのようで、きらびやかな宮型を見かけることはめったにありません。それは、家族縁者が、目立つのが嫌、周囲に亡くなったことを知られたくない、という感覚に変化したことも背景にあるようです。

病院勤務のナースAさんは、エンゼルケアの際にご家族に、「自宅以外の場所に連れて行きたいんですが、どうしたらいいでしょう」と問われて、搬送を依頼した葬儀社に相談してみたい、と返答したそうですが、なぜ自宅に連れて帰りたくないのか、マンションにエレベーターがないなど物理的に連れて帰れないのか、理由を聞けなかったそうです。ご近所に知られたくなかったからかもしれませんね。

図3
宮型霊柩車



図4
洋型霊柩車

